事例報告

総合系科目・多彩な学び「手話と人権を考える」

オンデマンド授業の効果的な実施事例について

全学共通カリキュラム運営センター兼任講師　佐伯 敦也

はじめに

筆者は 2014 年度から本授業を担当し、2020 年度からはコロナ禍を契機としてオンデマンド型の授業を実施しました。この授業形式の移行により経験したオンデマンド型の持つ強みと効果について記します。

オンデマンド型の強みは、受講者側で教材の利用進度を調整できることと学習時間を効果的に配分できることだと考えます。本授業「手話と人権を考える」の目標は「ろう者、手話について知り、経験することを通して、共生社会を考えるための新たな視点を獲得する」こととしていますが、オンデマンド型を導入したことにより目標達成を促進させる効果がありました。本授業の目標を改めて 3 点に分け、授業形式と目標達成について述べます。

手話を理解する

目標の 1 点目は手話そのものの理解です。手話というものがあることは一般に認知されていますが、手話とはどういうものかまでは知られていません。またよく知らないけども音声言語の代替物だろうという思い込みも先行しています。しかし本授業で理解の対象とする「日本手話」は日本語と全く異なる自律した自然言語であり、独自の語彙体系、文法構造を持っています。日本手話とは言語としての固有名称であり、日本語を基にした手話という意味ではありません。そして手だけではなく眉の上げ下げ、目の開閉、視線、口の開閉、顎の動きも使われ、文法を表す上で欠かせない要素です。しかしこれらの各部位の動きを捉えるのは、手話に触れたことのない多くの者にとって困難です。そのため受講者が正確に理解するには要所の解説を理解しつつ、各個人が把握できるまで手話画像を繰り返し見ることが必要です。しかし対面型授業では時間に制約があるため、画像を 2 回程度見せただけで進行しなければいけません。また受講者自身が手や顔を真似て動かせば効果的に学習できるのですが、数十から 100 名を超えた個々の匿名性が高い教室内では恥ずかしさが勝るのか、促しても動かそうとしません。また各要所の説明は手話言語学で使われる専門用語が多く、授業時間に対する新規の情報量が過多にならざるをえません。消化できない情報量を詰め込んでも学習効果は薄れるだけですので、対面型においてはかなり割愛するのが通例でした。しかしそうすると日本

手話が日本語と異なる言語であると知識としては知れても、具体的に何が異なるのか理解し難い状態になります。しかしオンデマンド型では個人の理解度に合わせ、繰り返したり途中で静止したりできます。授業進行においても明確にポイントを述べ、把握してから進むよう指示しました。解説すべき内容を大幅には削減せず盛り込むこともできました。また受講者自身の手、顔などを動かす課題も用意し、実際に手話画像の通りに動かすよう促しました。受講生からの反応を見ても、気兼ねなく自身の手、顔を動かせていることが分かります。このようにオンデマンド型を活かした学習への手立てを複数用意した結果、手話についての理解がより正確になりました。

ろう者を理解する

目標の 2 点目は、ろう者についての理解です。ろう者という言葉からは聴覚に困難がある者という意味が浮かびがちですが、ろう当事者は違います。当事者の主張するろう者とは、手話を用いてコミュニケーションを行う者、手話を母語とする者、視覚を中心に据えた行動様式および生活文化を持つ者です。つまり当事者は自らが持っている特長に基づいたアイデンティティを主張しているということですが、初めて聞いた受講者は信じられないと疑いの目を向けがちです。「それは講師の私見に過ぎない」「少なくとも日本の考え方ではない」と否定し拒絶する者が多くを占めます。実のところ日本国内では 1990 年代半ば頃から、ろう当事者は草の根で主張していますし、2014 年日本が批准した障害者権利条約（第 30 条 4）にも同趣旨の内容を見てとることができるのですが、確かに認知は広がっていないかもしれません。しかしそれだけに、ろう者への理解は知識を伝えるだけでは成立しません。受講者が無意識に抱いている社会的通念と視点に気づき、批判的に検討するという内省的かつ能動的な学習が必要です。そのために課題への取り組みも重視しました。授業時間の一部を受講者の学習時間として当て、資料を読み込み、考察を執筆することにしました。授業としては要約課題および発展的課題を用意し学習の深化を目指しました。要約課題としては「日本における『ろうコミュニティ』の成立」「手話にまつわる誤解と実態」などについてまとめるものであったり、発展的課題としては「ろう者によるアート活動の目的と効果」「ろう者が手話通訳を担う『ろう通訳』の仕組みと利点」などを調べるものであったりしました。このように受講者が主体性を持って学習する時間を用意すると、当たり前に持っていた通念を客観視し、当事者の主張に学ぶ姿勢をより引き出せるようでした。こうした授業展開は学生が一斉に授業を受ける対面型では決して簡単ではありません。特に 100 名を超える規模ではリアクションペーパーの記入のような軽い課題でさえ取り組みの差が激しく、時間の効果的活用が困難です。しかし個人に合わせた学習時間を配分できるオンデマンド型では対面型での制約を難なく解消できます。その結果、ろう当事者の視点に立った理解がより促進されたとレポートなどから伺えました。

経験し、共生社会を考えるための新たな視点を獲得する

目標の 3 点目は手話とろう者について確かに理解した上で、可能であれば関連施設や行事に参加したり、改めて手話やろう者に関わる情報を解釈しなおしたり、受講者自らの経験についてろう当事者の視点から振り返ったりすることなどです。

これらは授業としてフォローできる範囲から超えるものですが、自由提出としているリアクションペーパーを通じ、実践を報告してくれる受講生がいました。2022 年 6 月から 12 月 JR 上野駅で環境音を視覚的に表現する装置「エキマトペ」の実証実験が行われたのですがこれを見にいった受講生、JR 国立駅ビルにおいてろう者が従業員として働くカフェを利用した受講生もいました。またろう当事者の視点から振り返りを行った例としては、手話に関連した活動を再考し始めた受講生、ろう児への教育活動について再確認をした受講生などもいました。また筆者は手話というのは、聞こえる人にとっても有効であり音声や文字がカバーできない領域で機能することを話しています。いわゆるベビーサインや難聴の高齢者とのコミュニケーション手段としてですが、これについてアイディアとして家族と情報共有する受講生もいました。

このように目標の 1 点目と 2 点目を踏まえた上で新たな視点を携え、手話やろう者に関わる経験をする、これまでの経験を再考する、新たなアイディアとして取り入れるなど実践が広がったことは、授業の手立てが目標の 3 点目も促したものだと考えます。

おわりに

ここまで記したことは比較的少人数の受講者数であれば対面型でも可能です。しかし本授業のように受講者数が約 300 名となると、受講者に合わせて教材の利用進度を調節でき学習時間を効果的に配分できるオンデマンド型がその強みを発揮し、各目標の到達に寄与したのではないかと考えます。

さいき　あつや